

## 証言：モンゴル抑留（2）

ボルジギン・フスレ

### 1. ジグジド・シャラブの証言

2013年5月5日、私はモンゴル国ウランバートルで、1945年に捕虜収容所で働いていたジグジド・シャラブ（Jigjid Sharav）の家で話を聞いた。以下は、セレーテル・ソミヤ氏（写真5）の証言の一部である。



写真5 ジグジド・シャラブ氏

私は1920年春の中月（5月）15日に遊牧民ジグジドの第5子としてトゥブ県バヤンツァガーン・ソム（行政単位）のゾグスルハイルハンに生まれた。父ジグジドには11人の子がいて、男の子10人、女の子1人だった。そのうち、5人が出征した。そのうち3人はハルハ河（ノモンハン）戦争でたたかい、2人は1945年の解放戦争（対日戦）に参加した。弟のセルジブ、ナツァグドルジは解放戦争に参加した。

私は18才の時、入隊した。1939年にはモンゴル人民革命軍第5騎兵師団の一員として、ハルハ河（ノモンハン）戦争に参加した。師団長はドルジで、私は大砲と重機関銃の照準

手であった。1944年にトゥブ県バヤンツァガーン・ソムのソソルと結婚した。同年退役し、しばらくの間、仕事はなかったが、1945年秋に捕虜収容所に就職し、統計の仕事などに携わった。同時に1947年までモンゴル国立大学経済会計クラスで学んでいた。

当時、日本人捕虜は中央図書館、外務省、エルデブ・オチル映画館、文化宮殿、オペラ劇場、政府庁舎などの建築現場で労働していた。私の仕事は捕虜の人数を確認することであった。毎日の朝と夜、人数を確認するのであったが、捕虜たちと一緒に働いたこともある。捕虜たちは第13住民区(gudamj)に収容されていた。

私は1946年からは政府住宅事務室、建築材料供給市場、住宅トラストなどで会計の仕事をしていた。私は父と同じく11人の子供を育てた。1980年に定年退職した。

## 2. セレーテル・ソミヤーの証言

2013年5月5日、私はウランバートルで、1945年の対日戦でたたかい、のちに日本人抑留者を護送した元モンゴル人民革命軍のセレーテル・ソミヤー(Sereedel Somiyaa)の家で話を聞いた。以下は、セレーテル・ソミヤー氏(写真6)の証言の一部である。

私セレーテル・ソミヤーは1919年11月20日にドンドゴビ県エルデニダライ・ソムのツァガーンジルムで生まれ、10才から16才までは僧侶だった。当時、お経を読むことは日課で、チベット語も読めていた。今はお経も読まず、チベット語も読めなくなった。

私は1939年4月に入隊し、第31分遣隊の兵士として5月28日からハルハ河(ノモンハン)戦争に参加した。私たちの部隊はエンゲルサンドに駐屯していた。私は砲兵で、日本空軍の戦闘機1機を撃墜した。終戦の時はハルハ河東岸で戦場の整理の仕事にも携わっていた。たくさん日本人、バルガ人、内モンゴル人捕虜がいて、誰が日本人、誰がバルガ人、内モンゴル人であるかはあまり区別できなかった。ソ連軍のほうはのちに、日本軍捕虜と満洲国軍(バルガ人、内モンゴル人)捕虜を区別するようにして、多くの日本人捕虜をソ連に移送し、バルガ人、内モンゴル人捕虜をウランバートルなどモンゴル国内の各地に移送し、働かせた。一部の捕虜は刑務所に入れた。のちに、私はソ連のキエフ(?)の軍学校に3年間ほど留学した。

第二次世界大戦の時、ソ連政府は16才から65才の国民を徴兵し、大祖国戦争に参加させた。戦争の後半、私もソ連軍と一緒に行動し、戦場で、衛生兵として、ソ連軍の負傷者の搬送などにたずさわった。私は1945年10月にナウシキでモンゴル側の関係者と合流し、「日本軍捕虜」をうけとり、スフバートル経由で、ウランバートルまで護送した。日本軍捕虜が乗った列車にはトイレがなく、一つ一つの車両の中に一つの穴をあけて、大便と小便はそこで済ませるのであった。ナウシキからウランバートルまでは鉄道がな

かったため、歩いて行った。スフバートルから日本軍捕虜を車でモンゴル（ウランバートル）に送った。捕虜たちは皆、夏服を着ていた。私が護送した捕虜のうち、12名が亡くなった。

日本軍捕虜のなかには女性もいた。最初は誰も知らなかった。ウランバートルにつくところで、やっと、捕虜のなかに、なんと女性がいると知った。彼女は勇気のある女性だった。

その後、私は学校の教員になった。自分の仕事は捕虜と関係なかったが、当時モンゴルにたくさんの日本人捕虜が働いていたことは知っている。



写真6 セレーテル・ソミヤー氏

上で述べられた女性の日本人捕虜は、間違いなく加倉井文子である。当時、ソ連兵も、モンゴル兵も男装した彼女が女性であることをみやぶれず、スフバートルからウランバートルに向かう途中ではじめて女性がいることに気づいたという<sup>1</sup>。

### 3. ホシヨードオチル・バザルドルジの証言

2014年12月25日、私はチョイバルサン市において、モンゴル国「バルガの遺産」協会長

<sup>1</sup> 加倉井文子『男装の捕虜』（有楽出版社、1949年、pp. 114-117）。

Ts. トゥメン (Ts. Tumen) と一緒に、日本人捕虜の移送業務にたずさわった元モンゴル人民軍第7騎兵師団第20騎兵連隊第4中隊の兵士ホショードオチル・バザルドルジ (Hoshuud-Ochir Bazardorj) の家で話を聞いた。以下はバザルドルジ氏 (写真7) の証言である。

私ホショードオチル・バザルドルジは1926年にスフバートル県オンゴン・ソムに生まれた。1945年に入隊し、バイシantaiに駐屯していた。同年8月、モンゴル人民軍第7騎兵師団第20騎兵連隊第4中隊の兵士として、解放戦争(対日戦)に参加した。私たちはスフバートル県ナラーン・ソム南部のハンギン・ボラグから(中国の)内モンゴルに入った。馬に乗って昼夜兼行で、戦いながら前進し、わずか数日でドローン・ノール(多倫諾爾)に着き、占領した。ドローン・ノールは非常に広がった。その後チカ(熱河)に着いた。熱河で日本軍の一つの連隊が投降した。詳しい人数はわからないが、1000人ほどだったと思う。熱河でわれわれはソ連赤軍と一緒に戦勝を祝った。(9月2日、あるいはその直後の戦勝セレモニーのことを指すと思われる——筆者)。

私たちはそこから日本軍を護送し、まずは東にむかって歩いた。150キロほど歩きつづけたと思う。日本人捕虜は列になって歩き、私たちはその両側に銃をもって、護送した。十数日間歩きつづけた。ある激しい川を渡った時、大雨も降ったので、たいへんだった。仕方がなく、皆馬に乗って、交代で川を渡った。その後中国の列車に乗った。途中で小さい戦いもあった。どこかの小規模な反乱部隊があったようである。私たちはその戦いには参加しておらず、ほかの部隊がその反乱をおさえた。そこで貨車に乗り換えて、北東、北にむかって前進しつづけて、奉天(瀋陽)をへて、ハイラルに着いた。貨車のなかでは、真ん中には貨物があって、その両側に日本軍捕虜がすわり、われわれは入口で見守っていた。車両一台に捕虜が70人あまり、モンゴル軍3人という状況だった。貨車なので、トイレがなかった。だから、大きい盆か桶を探し出して、大小便はそれで解決していた。いっぱいになったら捨てればいい。それを見て笑いさざめく捕虜もいた。最初はなれなかったが、慣れたらみんな気にならなくなった。

日本軍捕虜のなかにはさまざまな人がいた。少し年配の捕虜もいた。40才ぐらいかな。金歯を入れた者もいた。タバコを吸う捕虜は少なくなかった。日本製のタバコを吸う者もいて、私に「吸うか」と聞いて、1本をくれた。そのタバコのパッケージには銃をもつ日本兵の姿が印刷されていた。(絵柄から考えて、戦時中の軍用煙草「極光」ではないかと思われる——筆者)。

私たちはあまり捕虜と話をしなかった。話す場合は、ロシア語で話した。われわれの部隊のなかにロシア語のできる者がいて、日本軍捕虜のなかにもロシア語のできる者がいたので、ロシア語で話していた。

日本軍捕虜は自分で料理をつくっていた。彼らは自分の食糧を背負っていた。一つの街についたら、皆貨車から降りて、3、5人か、10人ぐらいが一つのグループになって、さまざまな料理をつくっていた。彼らは米を炊いて、手で包んで食べていた。(おにぎりのことか——筆者)。また、赤いごはん〔赤飯〕を食べていた。とても面白かった。私たちも自分で携帯していた食料、あるいは簡単な料理をつくって、食べていた。正直、日本軍捕虜の食事はわれわれのより良かったと思う。

私たちの衣服の状況も厳しかった。1945年8月に戦場に赴いた際、私たちは夏服と靴しかもたず、9月にそのまま日本軍捕虜を護送した。多くの人の靴は途中でやぶれて、マンチュウリ（満洲里）に着くまで衣服などの補充もなかった。護送途中、私の靴もやぶれてしまい、中敷きもとれてしまった。仕方がなく、最初は針金で縫い、その後、鞍の皮を切りとって、靴を縫って使った。軍人だから、厳しさに耐えらなければならず、裸足でも前進しなければならなかった。そのまま、黒竜江に着くまで改善はなかった。マンチュウリでやっとソ連軍から、対日戦の戦利品のなかから日本軍の衣服・靴・帽子の補充がえられた。日本軍の衣服・靴などは毛皮のもので、質は本当に良かった。また、貨車の中国領内での移動の速度はおそかったが、ソ連領に入ってからはやくなった。

ソ連のチタ、ウランウデなどを経て、ナウシキに着いたのは夜だった。私たちの車両で一人の若い捕虜が亡くなった。翌日、ある日本の軍医と何人かの将校が、私たちの見守りのもと、山に登り、その死者の指を切り取って、死体を燃やし、簡単な追悼のような儀式をした。将校の一人がその指を持ち帰った。

ナウシキから十数キロを歩いて、わがモンゴルにもどった。われわれは列になって、徒歩でスフバートル市に入った。将校が一番先頭に、われわれ兵士はその後ろについていた。ナムダグ少佐が部下をひきいてわれわれをむかえた。数か月間の道、みんなたいへん疲れた。その日、肉の料理がふるまわれた。

スフバートルから日本軍捕虜をウランバートルなどモンゴルの各地に送った。日本軍捕虜のなかには女性一人がいると聞いたことがあるが、私はその人には会ったことはない。

当時、セレンゲ県があったね。私はセレンゲ県の収容所の仕事にたずさわった。日本人捕虜は5、6人かあるいは10人、20人ほどが一つのグループになって、働いていた。井戸掘りや木材関係の労働をしていた。わが政府は彼らに作業服を提供した。もちろん、彼らはそれまでの自分の服ももっていた。捕虜たちは作業現場で働き、われわれはその周りで見張っていた。日本軍の将校は現場で指示したり、人数を確認したり、料理のメニューを決めたりなどをして、労働には参加しなかった。捕虜の炊事員も料理をつくるため、労働には参加しなかった。捕虜たちはみな自分の歯磨きセットをもっていた。彼

らは夜か朝、歯を磨くのだ。夏になると、労働の後、捕虜たちは相撲もとっていた。われわれはそれを見まもるだけで、関与はしなかった。ある捕虜は音楽の才能があって、よく歌をうたっていた。ある日、私が歩哨にたったとき、モンゴルの歌声が聞こえた。不思議に思い、探してみたら、一人の日本人捕虜がその歌をうたっているのに気づいた。彼はモンゴルの楽譜を見て、自分でつくった楽器を弾きながら、モンゴルの歌をうたったのである。「ガンツ・モド」という歌だった。本当に素晴らしかった。その人はのちにどうなっただろう。

1946年に私はウランバートルの収容所に移動させられた。捕虜たちは建築、レンガ焼き、鍛冶、伐採、大工など、さまざまな労働に携わった。

当時、内モンゴルのデ・ワン(テムチュクドンロブ王、徳王)の軍隊もやってきた。セレンゲ県にいた時も、ウランバートルにいた時も、一緒だった。彼らは白い服を着ていた。けっこうな人数がいた。彼らはわれわれと一緒に当番で、歩哨にたったり、捕虜を見張ったりしていた。彼らは最初はかなりお金をもっていた。のちにお金を全部使い切ったそう。彼らが話すモンゴル語はわれわれとちょっとことになって、最初はよく聞き取れなくて、のちに互いになれた。当時ローガイ(?)という内モンゴルのジリム盟出身の者、またマンハンというウジュムチン出身の者などがいたのを覚えている。彼らは漢字が読め、日本語も話せたため、よくわれわれ(モンゴル軍)と日本人捕虜の間で通訳になっていた。彼らは日本人捕虜と仲がよく、よく日本語で喋っていた。彼らは最初のうち、規律を守っていたが、のちにだんだん緩んでいった。さらに規律違反も起こした。彼らはこっそりと街に出て、日本人捕虜のために小麦粉と砂糖などを買ってきてあげた。われわれは歩哨の当番になったら1回4時間立つのだった。ホジルボランにいた時、ある日、バルダンというデ・ワンの軍隊の兵士が歩哨の当番だった。しかし、しばらくの間、彼の姿が見えなくなった。みんな探してみると、労働の時間なのに、日本人捕虜がみな働かずに、バルダンをかこんで笑いながらおしゃべりをしているのをみかけた。彼は銃をそのままそばに置いていた。これは非常に危険なことだ。労働をおろそかにしたことにとどまらず、銃が日本人捕虜に奪われたらどんなことになるか。われわれ(モンゴル軍)はバルダンを黒い部屋(営倉)に入れた。すると、内モンゴルの将兵たちがみんな怒って、われわれを殴ろうと、かこんでやってきた。ちょうどその時、ある下士官がやってきて、「どうした」と聞いた。われわれはこのことを報告した。その後、内モンゴル兵全員が交代させられた。彼らに捕虜の見張りの仕事をまかせなくなった。彼らは国营農場で耕作などの仕事をさせられ、ばかなめに遭った。

捕虜たちはよく「ご苦労さん、ご苦労さん」と言ったね。また、「はやく、はやく」とか、「時計」、「何時」、「パン」とか言っていた。私も少し日本語を覚えたよ。コンニチハ、イチ、

ニ、サン、シ…キユウ、ジュウ…。日本人捕虜と一緒に2年間ちかくもいたからね。

私は1947年に異動になった。山で木の伐採の仕事をするようになった。そのため、日本人捕虜と別れた。彼らもその年、日本にもどった。当時、捕虜管理庁の長官はソソルボラム少将であった。日本人捕虜たちが帰国した後、捕虜管理庁は建設省〔建設管理庁〕となり、ソソルボラムはその長官になった。

私の最終の階級は大尉で、1949年に退役した。その後、私はウランバートルでソ連人と一緒に防衛関係の仕事をし、4年間全国各地で偵察の仕事をしていた。その仕事を終えた後、映画上映の仕事に携わった。仲間に多くのソ連人がいた。仕事をしている間に、私もきちんとロシア語を覚えた。のちに私が一台の車を運転して、全国各地をまわり、映画を上映しつづけた。全国21の県を全部回ったよ。

私は1968年にドルノド県に定住し、1986年に定年をむかえた。



写真7 左より、ホシヨードオチル・バザルドルジの娘ゾリグトサイハン、バザルドルジ氏、Ts. トウメン氏

上で述べた、日本軍の将校が死んだ戦友の指を取り切って保管していたことについては、ほかの、抑留者を護送したモンゴル兵あるいは収容所の管理者も証言している。例えば、1945年に捕虜収容庁管理部長をつとめていたD. バボードルジ (D. Babuudorj、当時の階級は少佐) はその回想録で下記のエピソードを残している。日本軍捕虜の長の一人石井少佐が現地で死んだ自分の部隊の兵士の親指を切り取って、姓名・年齢・出身地を記して保管

していた。このことを知ったバボードルジは、石井少佐の通訳をつとめるテムチュクドロブ王軍の内モンゴル人職員を呼び、事情を聴いた。その通訳は、「われわれの長石井少佐は、亡くなった人びとの右手の親指を切り取り、その人の名前と年齢・出身地、いつどんな病気で死んだかを特別な文字と数字で記し保管している。いつか故郷に戻った時、家族にわたすのだそうだ。これは天皇に対する誓いを守る日本軍指揮官たちの作法なのだ」と答えた。バボードルジは石井少佐を営倉にいれようと思ったが、その前にモンゴル内務省のソ連人顧問補佐デメンティフ大佐の意見を聞いた。デメンティフ大佐は、「これはわれわれの言う“愛国精神”にはかならない。彼らも軍人だ。われわれも軍人だ。石井少佐が部下の兵士たちを日本の戦士たちの侵略政策遂行のための肉弾とするにとどまらず、兵のため、彼らの父母・妻子のためとの慈愛なのだろう。これを理由に彼を責めたり、営倉に入れたりしてはならない。この指を返してやれ」と言った。職場にもどったバボードルジは、石井少佐とその通訳を呼び出し、指を返した。石井少佐は席から立ちあがり、「私は軍人だ。天皇陛下に対して、兵の指揮にあたっては父母の代わりとなると誓った。この兵たちが私の指揮下にあることを、彼らの親族は知っている。彼らの同郷の兵たちが今生きて国に帰ろうとしている。私は軍人として誓いを遂行しているのである。あなたも軍人であれば、誓いを守ろうと考えられるだろう。少佐殿、あなたに心から感謝申し上げる」といい、頭を地につけんばかりにしてお辞儀をし、指の入った袋を持って行ったという<sup>2</sup>。(日本語訳文の原文は「です・ます」体、引用の際「である」体に改めた)。

#### 4. ゲンデン・ハルザンの証言

2014年12月25日、私はまたチョイバルサン市でTs. トゥメン氏と一緒に、日本人捕虜の移送、捕虜収容所の管理の業務にたずさわった元モンゴル人民軍第8騎兵師団のゲンデン・ハルザン氏(写真8)の自宅で氏の話聞いた。

私ゲンデン・ハルザン(Genden Khalzan)は1925年10月5日に、ゲンデンの長男として、スフバートル県オンゴン・ソムで生まれた。1944年に入隊し、モンゴル人民革命軍第8騎兵師団の機械化部隊連隊の一員になった。1945年8月、われわれはソ連赤軍と一緒に国境を越え、一日100～150キロのスピードで前進し、ドローン・ノール、張家口などを経て、古北口、万里の長城に達した。中国人民と内モンゴル人を日本の支配下から解放し、第二次世界大戦の勝利、平和に貢献した。われわれは日本軍捕虜を、中国の東北地域

<sup>2</sup> ホーホノイ・バトサイハン著、岡洋樹訳「モンゴルにおける日本軍捕虜」(『日本とモンゴル』第39巻第2号、2005年、pp.58-59)。



とソ連のシベリアをとおり、モンゴルに連れて帰ってきた。日本軍捕虜たちはウランバートルをはじめ、モンゴルの各地で労働していた。私が護送した日本人捕虜はウランバートル北部の第9区 (gudamj) で建築などの仕事をしていて、そこには漢人、内モンゴル人もいた。日本軍の将校が部下を殴るのを見かけた。彼らはかなり苦勞していた。

私が護送した日本軍捕虜のなかに女性もいた。最初は、私たちは誰も知らなかった。彼女は髪を短く切り、男性の服を着たので、われわれは誰も彼女が女性ではないかと疑わなかった。彼女は夫についてきたのだ。モンゴルに着いた後、彼女が女性であったことを初めて知り、みんなびっくりした。彼女は日本に帰る前に、われわれに「モンゴル、ありがとう」と言っていた。

日本人捕虜は2年間働いた後、日本に帰った。

私は1948年に退役した後、モンゴル革命青年同盟スフバートル県オンゴン・ソム委員会委員長、同県運輸局労働関係室々長、『スフバートルリン・ザム』新聞社記者、ドルノド県ディーゼルステーションのエンジニア、シフトマネージャー、同県火力発電所運転手兼シフトマネージャーなどの仕事をし、1985年に定年をむかえた。



写真8 ゲンデン・ハルザン氏

## 5. パラム・ガルバドラフの証言

2015年5月3日、私はウランバートルのパラム・ガルバドラフ (Palam Galbadrakh) 氏 (写

真9) の家で、氏の話聞いた。



写真9 パラム・ガルバドラフ氏

私パラム・ガルバドラフは1940年にトゥブ県バヤンツァガーン・ソムのジュルガチンで生まれた。バルガ人である。1920年代、祖父が家族を連れて、(中国の)フルンボイルから移住してきた。

1946年、日本人捕虜がトゥブ県で10年制学校の校舎をつくっていた。父は大工だったので、政府に呼ばれて、日本人捕虜と一緒にその校舎の建設に携わった。当時は200人ほどの日本人捕虜がその建築現場で働いていたと思う。父は10人の捕虜を指導し、木材で門と窓などをつくっていた。食事は肉とパンなどがあって、日本人は羊肉にあまりなれなかったようである。道具も足りなかったようだ。父は優しかったので、日本人捕虜に「ラマ」と呼ばれていた。僧侶のように優しいからかそう呼ばれた。食事時間に、父はもらった食事を均等に捕虜に分けてあげた。校舎の建築の現場はわが家に近かったので、私たちは毎日のように捕虜に会っていた。彼らのなかの何人かは時々われわれ子供を脅かし、パンをもらって食べていた。だから、子供たちはみな日本人捕虜を恐ろしがっていた。日本人捕虜の将校は厳しかった。時々部下をしかったり、殴ったりしていた。殴られて、泣いた捕虜もいた。父は日本語が話せない。捕虜たちはモンゴル語が話せない。だけど一緒に仕事をしているうちに、父は彼らとコミュニケーションできるようになった。

ある日、ある若い捕虜が父と何かを話して、泣いていたのを覚えている。1947年、10年制学校の校舎が完成した。別れる時、捕虜たちが皆列になって、父にお辞儀をした。父、母、姉、私と弟はみなその場にいた。捕虜のなかの何人かは父にノートとか、髭剃り、爪切りとかをくれた。その校舎は今も使われている。

私は成人になってから百貨店で仕事をしていた。また、軍にも入隊した。退役後は、大工の仕事をするようになった。定年後の今も、木彫などを行っている。

抑留をめぐる日モ両国の認識は異なる。これまで日本で出版されてきた研究書、抑留者あるいはその親族、ノンフィクション作家により書かれた体験記やドキュメンタリー作品等は悲痛な悲しみが帯びる。これに対し、モンゴルで出版された研究書等は、日本人のモンゴル抑留は、両国の政府と国民がお互いに歩み寄る大きなきっかけになったと評価している。本稿でとりあげた日本人抑留経験者2名と親族1名、および抑留者を護送したり捕虜収容所で管理したりした元モンゴル人民軍の軍人4名と抑留者の働きぶりを目撃した民間人1名(当時は子供)の語りもこの点を反映している。日本人のモンゴル抑留は、一方では、北東アジア地域の枠組みのなかでの日本とソ連・モンゴルの対立により生まれたものであったが、他方では、日本、モンゴルの国連加盟および両国の外交関係の締結において、間接的に役割をはたしたことは、事実である。抑留はその前の歴史およびその後の歴史とつながっており、この「出来事」をめぐる記憶と認識の「対立」をより客観的に認識し、のりこえることによって、日本とモンゴルの新たな歴史と社会的空間を創り出すことができる。

[付記] 本稿は公益財団法人村田学術振興財団助成プロジェクト「日本人のモンゴル抑留に関する映像アーカイブの構築」の成果の一部である。